

「おそる」と「おづ」、「かたみに」と「かたみに」の意味

— 中世王朝物語用語の用例から平安時代和文語の一側面を見る —

関 一 雄

はじめに

本稿は、中世王朝物語に見える平安時代の和文と漢文訓読に用いられた若干の語を手掛かりに、平安時代和文語の性格を溯つて考察してみようとする試み^(注1)の続きである。前稿においては、一般に漢文訓読語であるとされている「あはれぶ(む)」、「あやしぶ(む)」、「うつくしむ」等の動詞が、中世王朝物語の用語としても使われており、これを平安時代の和文のものと対比してみると、これらの動詞は、平安時代の漢文訓読語の後裔とは見られず、平安時代において日常用語であつたものが、中世王朝物語の用語となつたものであることを明らかにした。

本稿においては、表題に掲げたように一般に漢文訓読語とされている「おそる」「たがひに」と、それとは同義の語とされる「おづ」「かたみに」の中世王朝物語での使われ方を比較検討し、「おそる」「たがひに」が何故に平安時代和文語としては避けられたかを考えてみたい。

なお、本稿で用例採取に選んだ作品は、次の通りで、括弧内は引用に用いたテキストである。引用例にはそのテキストの所在ページ

を付した。

『海人の刈藻』『木幡の時雨』『苔の衣』『住吉物語』『風につれなき』『雫ににごる』『小夜衣』『しのびね』『しら露』(以上『中世王朝物語全集』、必要に応じて『鎌倉時代物語集成』の本文を参照した。)

『とりかへばや』(鈴木弘道『とりかへばや物語の研究校注編』)

『山路の露』(山内洋一郎『本文と総索引』)

『松浦宮物語』(萩谷朴『松浦宮物語』(角川文庫)、同『松浦宮全注釈』を参照)

『我身にたどる姫君』(徳満澄雄『全註解』、今井源衛・春秋会のもの参照)

の二三の物語。

一、「おそる」と「おづ」

(1)「おそる」

「おそる」は、『松浦宮物語』『我身にたどる姫君』『雫ににごる』に少なからず使われているが、地の文の例に限定して挙げる。

1 長さほこをとり、毒のやをまうけて、ふせぎたたかむとするに、

いくさ又おそれてすみながたき時に、『松浦宮物語』六一べ）
2 燕王のからきまつりごとをおそれて、ふかき山にあとをたちてければ、ゆきかふ人もなくて、『松浦宮物語』七三べ）

次の例は、「ふるふ」と複合した例で、宇文会という名を聞くだけで、震エ（オソレル）という心理動作の表現と認められる。

3 大将軍宇文会、あめの下ならびなきつは物にて、ちからのたへ、身のたれる事、世のつねの人ににず。その名をききてだに、ふるひおそれぬ人なし。〔松浦宮物語』五二べ）

次の三例は、〈恐縮スル〉意のものである。
4 舟波の内侍、かたちすがた人にすぐれたる若人、鬢・額、もの

さきに目に立ちて、〔略〕言ひ知らずうるはしき顔つくりておそれ参るを、〔我身にたどる姫君』巻六 四一五べ）

5 御扇五つ具して〔女帝ガ〕さし給はするを、〔舟波の内侍〕また給はりて、なほ開けて見、さし上げ、下ろしして、おそれてまた参らするを、〔我身にたどる姫君』巻六 四一六べ）

6 典薬某・いししいといふ者、参り候ひて、御葉の事などやすらかならず、いつかしき〔帝〕御身をおそれおちたるさま、限りもなきに、〔我身にたどる姫君』巻八 五一八べ）

6の例は「おそる」と「おづ」では、意味の相違することを示す例で、「おそる」が〈恐縮スル〉意の心理動作であるのに対し、「おづ」は後述する通り、それが態度に表れて、〈オズオズトスル〉動作の表現である。

7 権中納言は、よに、恐れ参り給はず。〔零ににじる』二四べ）
右の例は、権中納言との不倫ゆえに内侍督をかつて離縁した帝が、

「おそる」と「おづ」、「たがひに」と「かたみに」の意味——中世王朝物語用語の用例から平安時代和文語の側面を見る——

今は内侍督の死を悼み、権中納言は帝の怒りを恐れて、参内できない場面である。

次に名詞の「おそれ」は、『山路の露』『小夜衣』に次のように使われている。

1 守も「略」みのほどにも過たる御めぐみをよろこび思ひのたまふ心ふかけれども、きこえさせむにつけておそれに思ひたまへつ、まれ侍る。〔略〕などい、ちらしてたちていぬめり。

〔山路の露』三二べ）
2 かくあやしげなる男のものしげなるが、なにの恐れもなく、

〔小夜衣』一四五べ）
前者は、常陸介の会話に用いられたもので、後述の『源氏物語』浮舟巻の内舎人の会話の動詞「おそる」と共通するとも見られるが、

後者は民部少輔が山里の姫君に遠慮なくふるまうことを述べた場面のもので、両者に共通するのは、前掲4・5・6の「おそる」の名詞化と見てよさそうな意味で用いられていることである。

「おそる」の平安和文の例は、次の通りである。

① 春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ、秋のよのながきをかこてれば、かつは人のみ、におそり、かつはうたのころにはちおもへど、〔古今和歌集』仮名序*「大系」一〇三べ）

② 〈忠遠「略」がくもんにつかる、をば、一どのしきおこなおおそれて、つかれふすることなし。あとをたちてこもり侍がく生なり〕

〔宇津保物語』まつりのつかひ「本文と索引 本文編」四四四べ）
③ 近江の守、〔帝ガ〕いかにきこしめしたるにかあらむと歎き恐れて、

「おそる」と「おづ」、「たがひに」と「かたみに」の意味——中世王朝物語用語の用例から平安時代和文語の側面を見る——

〔略〕帰らせ給ふ打出の浜に、世の常ならずめでたきかり屋どもをつくりて、菊のはなのおもしろきをうへて、御まうけつかうまつれりけり。国の守もをぢ恐れて、ほかにかくれをりて、たゞ黒主をなむすへ置きたりける。

〔『大和物語』一七二段「大系」三四五べ〕

④唐土の帝、この国の帝をいかではかりて、この国打ち取らむとて、常にこころみ事をし、あらがひ事をして、おそりたまひけるに、

〔『枕草子』二二七段「新編日本古典文学全集」三六二べ〕

⑤〔内舍人〕「略」便なき事もあらば、重く勘当せしめ給ふべき由なる仰言侍りつれば、「いかなる仰言にか」と、恐れ申し侍る」

〔『源氏物語』浮舟「大系」(五)二六四べ〕

右の他に、『大鏡』に七例、『俊頼髓腦』に四例見られるが、前掲の五例から前稿で採り上げた「あはれぶ」「あはれむ」に準じた考え方ができると思う。即ち、「おそる」は心理動作語であつて、具体動作を通して物語の登場人物の心理を描き上げることが基本とする平安和文語には、馴染まない語であつたのである。

用例⑤の『源氏物語』のもの、内舍人という下級役人の会話に使わせることによつて、物語中での異様な場面を作り出したものとも考えられそうである。これを聞いた浮舟の侍女右近は、「梟の鳴かんよりも、いと物恐ろし」とおびえるのである。

③の『大和物語』のものは〔兎縮スル〕に近い意のもので、「我身にたどる姫君』『雫ににこる』のそれに一致する。

(2)「おづ」

「おづ」は、『松浦宮物語』「我身にたどる姫君」に次のように使われている。

1 かれ〔胡兵〕がみじかきゆみやのおよばぬ程より、みならずなき箭をはなつに、かしこきかためとたのめるあつきいたを、かれたる木の葉などのごとくにとほりて、うちなる人にあたる時、えびすふるひおぢて、くだりしりぞかむとする時に、

〔『松浦宮物語』六一べ〕

右の例は、眼前に展開される状況を見て、「えびす」が、震エヘオビエル動作の表現である。「ふるふ」と複合しているが、「おそる」の3の例とは明らかに相違している。

2 言へば〔関白ハ中宮ヲ〕さしもおぢきこゆべきならねど、

〔『我身にたどる姫君』卷三 一三九べ〕

3 その後は、かつおなじうち候ふ中将の君あしく思ひきこえたるをと、〔狂前斎宮ハ〕おぢなげき、ともすれば声をたててひめかせたまふ。(『我身にたどる姫君』卷六 二八五べ)

3 は、侍女の中将の君に対し、狂前斎宮のする動作で、「わななく」に近い。

4 〔三位大基〕「略」滝口など呼ばせて打たせん」など宣はせけるにおぢて、典侍殿もこよひは対面したまはぬなめり。はや、人に見え聞かれず、しのびて出でたまひね。〔略〕と宣へば、名残りなくわななきて出でにけり。

〔『我身にたどる姫君』卷六 四二四べ〕

右の場面は、三位の会話が終わつた後、これを聞いた大基が「わななく」とある。この例からしても「おづ」は、眼に見える動作を

表し、「わななく」に近い。

次に「おづ」と同じく動作の表現と見られる「おそろしがる」は、『木幡の時雨』に次のように使われている。

○(中納言)「略さのみかく恐ろしがるべきことかは」(一四六)
これについては、後述する。

「おづ」の平安和文の例は極めて多いがその中で注目すべきものを挙げる。

①大宮の御兄の藤大納言の子の頭弁といふが、略妹の麗景殿の御方に行くに、大将の、御さきを忍びやかに追へば、しばし立ちとまりて、「白虹、日を貫けり。太子、おちたり」と、いとゆるらかにうち誦したるを、大将、「いとまばゆし」と聞き給へど、咎むべき事かは。(『源氏物語』賢木「大系」(一)三九七六)

右の例は、漢籍からの引用の「おづ」で、漢文訓読語でも「おづ」が用いられたことを示すものである。⁶⁾

②わか君(若衆)は、いと恐ろしう、「いかならん」と、わな、かかれていと美しき御肌つきも、「そぞろ寒げ」に思したるを、略(源氏公)あはれにうち語らひ給ひて、「いざ給へよ。をかしき絵など多く、難遊びなどする所に」と、心につくべき事をのたまふけはひの、いとなつかしきを、幼き心地にも、いといたうおぢず、さすがにむつかしう、寝も入らず、みじろき臥し給へり。

(『源氏物語』若衆「大系」(一)二二七六)

右の例で、「おそろし」の直後に「わななく」が使われていることから、「わななく」は、「恐れる」思ひの仕草に表れたものである

「おそろ」と「おづ」、「たがひに」と「かたみに」の意味——中世王朝物語用語の用例から平安時代和文語の一面を見る——

ことが分かるのに対し、「おづ」はそれ自体で、「恐れる」思ひを仕草に表す語であるという違いが見られよう。

③(右近)源氏「略頭の中將、まだ少將にもし給ひし時、見そめたてまつらせ給ひて、三年ばかりは、心ざしあるさまに通ひ給ひしを、こぞの秋頃、かの右の大殿より、いと恐ろしき事の聞えまて来しに、ものおぢをわりなくし給ひし御心に、せん方なく思しおぢて、西の京に、御乳母住み侍る所になん、はひかくれ給へりし。略」(『源氏物語』夕顔「大系」(一)一六六六)

④(狭衣公)御有様の、よろづこの世の人とも見え給はず、(両親公)いとゆ、しきにおほしおぢて、御位をだに、「あまりまだしきに」と、ちごのやうなるものに、思聞えさせ給ひたるを、

(『狭衣物語』卷一「大系」三三三六)

③④の「おほしおづ」は、上述の如く仕草を表す「おづ」に「おほす(思す)」が複合して心理動作を表す語となったものである。思うに、「おそろ」は物語用語としては避けられたために、それと同義の「思ひおづ」を物語作者が造語したものであろう。⁷⁾

次に、前述の『木幡の時雨』の「おそろしがる」に関連して、平安和文から『源氏物語』の一例を挙げてコメントしておく。

○(姝尼)「たゞ、わが恋ひ悲しむむすめの、かへりおはしたるなめり」とて、泣く／＼御達を出だして、抱き入れさす。「いかなりつらむ」とも有様見ぬ人は、恐ろしがらで抱き入れつ。

(手習「大系」(五)三四七六)

右の例は、この先行箇所、浮舟が妖怪かと、僧都の弟子達に「恐ろし」とされた場面があり、それを受けてここで「おそろしがる」

「おそろ」と「おづ」、「たがひに」と「かたみに」の意味——中世王朝物語用語の用例から平安時代和文語の一側面を見る——
が用いられるものである。『木幡の時雨』では「おづ」が用いられ
おらず、「恐ろし」からの派生である「おそろしがる」が選ばれた
ものである。

二、「たがひに」と「かたみに」

(一)「たがひに」

「たがひに」は、『松浦宮物語』『山路の露』『住吉物語』『海人の
刈藻』『小夜衣』『しのびね』『しら露』『木幡の時雨』と、中世王朝
物語の大半の作品に用いられる。

1 「いかでこの国をさりなむ」と思へども、たがひにまもりいまし
めつつ、いささかのひまなし。(『松浦宮物語』四五べ)

2 うこんも(略)めもくれて、こゝにては今一しほ涙におほ、れる
たり。いと久しくなりぬれども、たがひにうち出たまふ言葉もな
く、母君からうじてためらひつつ、「(略)などいゝつづけて、ふ
しまろび給へば、(『山路の露』三八べ)

3 中の君は姫君に、「これを」と聞こゆれば、姫君、「そなたにこそ」
と宣ふほどに、たがひに言ひかはし給ひて中の君、「(歌略)」

(『住吉物語』七〇べ)

4 大将の上「(略)」とのたまふさま、故上の御ありさま思ひ出でら
れて、(殿の上「(略)」など互ひに語り出でて、猛きこととはは、
堰きもあへぬ御さまどもなり。(『海人の刈藻』一一〇べ)

5 さまあしげにはげまし挑みて、互ひに争ひなどはものし給はざり
しかど、さすがに遅き疾き花のけぢめ、色香の深き浅きなどは、
はかなく言ひ通はし聞こえ給ひにける昔のこと、つくづくと思し

出でて、(『しら露』二五五べ)

1 は、弁の少将が国外へ出ようと思つても、太子方と燕王方とが交
互に監視警戒をしていて、その機会(間隙)の無いことを言つてい
る場面である。

2 は、右近と浮舟母とが感激の余りに、交互に話を交わすこともな
らない状況を述べた一節である。

3 は、中の君と姫君がかわるがわる話をする場面である。

4 は、大将の上と殿の上がかわるがわる語り合う場面である。

右の四つの例では、双方の動作が相手方に向かつてなされること
を「たがひに」が、表している。

5 は、大君が白露の君と、花の早咲き・遅咲きを言い争つた昔の
ことを思い出している場面で、みつともなくは交互に争わなかつた
という一節である。

しかし、『小夜衣』では「たがひに」が多用され、その中には次
のような例が見える。

6 宮は、かかる絶え間を思ふにこそと、ことわりに心苦しめて、御
袖もうちしをれつつ、たがひにあはれに深き御仲の、(一六七べ)

7 (兵部卿宮ト山里の姫君ガ)いとど、らうたげなる御さまどもに、たが
ひにあはれなる御気色にてさし並び給へるは、(七六べ)

6・7の「たがひに」は、後続の「あはれに深き」「あはれなる」
を修飾し、「双方ともに」の意で用いられているものである。次の
三例も類似のものである。

8 (帝心中)「(略)(中納言ハ)大将の娘に、この頃かよふなるを、さや
うの乱れに思ひうんじて、この内侍をしるべに、まよひ出でつら

ん。もしさもあらば、たがひに思ふらんはことわりぞかし。〔略〕

〔しのびね』六一ペ〕

9 (中将ト白露君ハ) 互ひに、思ほへず、ゆくりなき様に逢ひ見給ふを、夢かとのみ思し辿らるるにも、わかれぬ御涙ぞとどめがたき。

〔しら露』二四五ペ〕

10 (中将ト翁・暹) 〔略〕さりとも、年頃慣らひ給ひて、今さらひき離れ給はんことも、互ひにいかにぞや思ひ給ふらんを、もろともにもさぶらひ給ひんや。(略) 〔しら露』二四七ペ〕

8・9・10の「たがひに」は、「思ふ」「思ほへ(ず)」「(いかにぞや) 思ひ(給ふ)」を修飾しており、「双方ともに」の意に採った方がよいと考える。8の例の『しのびね』には「かたみに」の例は無く、9・10の『しら露』には「かたみに」の例があるが、後述するように用法に特徴がある。

また、『木幡の時雨』の例は、

11年月の御物思ひのほども、たがひもしるく、青み瘦せ衰へ給ふさ
まいとわりなしと見給ふ。(五五ペ)

の如く「たがひ」とあるもので、テキストの訳は「たがいに(見て取られ)」とするが、「違いも(あらわで)」とも解し得るかと思われ、存疑である。

(2) 「かたみに」

「かたみに」は、『松浦宮物語』『山路の露』『雫ににこる』『風に
つれなき』『海人の刈藻』『しら露』に用いられている。

1・2ただ涙ばかりぞかたみにせきあへぬ。千夜を一夜にだにせむ
「おそる」と「おづ」、「たがひに」と「かたみに」の意味——中世王朝物語用語の用例から平安時代和文語の一面を見る——

すべなき心地に、鳥のこゑもきこゆれど、かたみにうごくけしき
もなし。(『松浦宮物語』七五ペ)

3いふかひなくをしきわかれに、思ひまどへるさまは、かたみにし
のびがたけれど、あけゆくをばわりなくのみ、のがれかくれぬれ
ば、なにかひなし。(『松浦宮物語』九八ペ)

4 (謎の女) 〔略〕と、ことわりばかりは、かたみにつつましかるべ
けれど、(『松浦宮物語』一〇〇ペ)

5宮のうへは、なをさまことなるむつびはかれも頼かはしたまへれ
ども、とし月のそふまゝに、かたみにおもくしくなりまさりた
まへれば、(『山路の露』四ペ)

6うちもまどろまずつきせぬものがたりに、ながきよの何ならず、
明けぬれば、かへりなむことを形みにあかず思ひ給。

(『山路の露』四五ペ)

7 (母君モ浮舟モ) かたみにしほれたたまへる袖のけしき、いとあみじ
うはるくくとわけ給し道のほども、さながらうつともおほえず、
(『山路の露』四七ペ)

8「今は」と思はん悲しさは疎かなるまじきを、かたみに、またな
き御思ひどもなれば、ものもおほえ給はず。

(『雫ににこる』一五ペ)

9女院も、内侍督のことゆゑにこそ、かたみに、御心置かれ給ひし
か。(『雫ににこる』三一ペ)

10今は一つにおはして、常に渡り見奉り給へば、かたみに嬉しく思
さる。(『風につれなき』一七四ペ)

「かたみに」は、「相互に」「それぞれに」のような意であること

「おそる」と「おづ」、「たがひに」と「かたみに」の意味 — 中世王朝物語用語の用例から平安時代和文語の一面を見る —

が、以上の例から分かるであろう。「かたみに」が修飾する後続句は、1「せきあへぬ」・2「うごくけしきもなし」・3「しのびがたけれ(ど)」・4「つつましかる(べけれど)」5「おもくしくなりまさり(たまへれば)」・6「あかず思ひ(給)」・7「しほたれ(たまへる)」・8「またなき御思ひとも(なれば)」・9「御心置かれ(給ひしか)」・10「嬉しく思さる」のように、状態的な表現であり、「たがひに」の後続句のように動作が交互に交錯して行われる表現とは相違している。

しかし、次の五例は右とは異なっている。

11 少将は、さまざまわすれぬおもかげそひて、うちなみだぐむ気色を、しらぬ国の人もあはれとみて、たびねも露けかるまじう思ひおきつつ、こまかに心しらへば、宰相もかたみにふみをつくりか
はして、興ありとおもへれば、(『松浦宮物語』二二二ペ)

12 (『新中納言』「略」とのたまへば、殿、「略」とて、かたみにうち笑ひて、御物語何よと聞こえかはして、

(『海人の刈藻』一六七ペ)

13 宮は、(略) 久しく会ひ給はざりしほどの御物語、尽きすべくもあらざ、かたみに言ひかはし給ふ。(『しら露』二二五ペ)

14 「略」「略」とかたみに言ひかはすほどに、

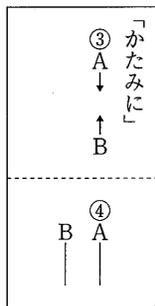
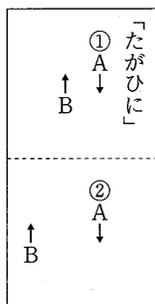
(『しら露』二四八ペ)

15 (乳母「今よりして、いよいよ御あたり近くさぶらひ慣れ、御しきもたまはりぬべき者に侍れば、かたみに隔てなく申し通はさん」(『しら露』二五一ペ)

この五例に共通するのは「かたみに」に修飾される動詞が「―

はす」「―通はす」の形を採り、それにより、「つくる」「聞こゆ」「言ふ」「申す」の動作が交互に交錯してなされることを表すという用法である。

すなわち、中世王朝物語に用いられた「たがひに」と「かたみに」の基本的な相違は、次のように図式化できるであろう(A・Bは動作の主体を表す)。



「たがひに」① A B の同じ動作が、僅かな時をおいて交互に行われることを表す(「交互二」の意)。

② A の動作の終了後に B の同じ動作が行われることを表す(「カワルガワル」の意)。

「かたみに」③ A B の同じ動作・状態が同時に相手に対して行われることを表す。(「相互二」の意)。

④ A B の同じ動作・状態がそれぞれに行われることを表す(「ソレソレ二」の意)。

このように考えると、前掲の「たがひに」の6・7の例は、①と③の相違が微妙なものであるために、③の状態を「たがひに」で表現してしまったものである、と言えよう。

また、「かたみに」の11～15の例は上記のような「―

通はず」形の動詞を修飾しているので、①の動作を表すことになったものである。

(3) 平安和文の「たがひに」「かたみに」と中世説話文学の用例について

漢文訓読語とされる「たがひに」は、漢文訓読によって齎されたものではなく、当時の日常的用語の「たがひに」が漢文訓読の際には選ばれたのに対し、和文語には、作中人物の具体動作をあたかも眼に浮かぶように表現し得た「かはるがはる」「かはりがはり」が用いられ、ために「たがひに」を用いることが稀になったものと考えられる。⁵⁰⁾

但し、「かはる(り)がはる(り)」は前述の「たがひに」の②の意味に限定されるため、③④の意味を表す「かたみに」が多用されることとなったものである。

平安末期成立とされる『今鏡』には、「たがひに」「かたみに」が次のように使い分けられている。

はじめは、人の扇に、一文字を男の書き給へりけるを、女の書き添へさせ給へりければ、男又見て、一文字添へ給に、たがひに添へ給ける程に、歌一つに書きはて給にけるより、心通ひ給ひて、夢かうつ、かなる事々も出で来て、「本文及び総索引」九三(六)

(大將殿 翁七) 又兵部督や、少將たちなど参り給へば、かたみに女^レの事などいひあはせつ、雨夜のしづかなるにも、語らひ給折もあるべし。(二四〇(六))

「たがひに」は「かはるがはる」と同義(②の意)であるが、「かおそる」と「おづ」「たがひに」と「かたみに」の意味——中世王朝物語用語の用例から平安時代和文語の一面を見る——

たみに」は後続の「いひあはず」「いひかはす」ではない)を修飾しており、④のものと解釈される。

「たがひに」「かたみに」の意味の相違は、中世のいわゆる和漢混淆文の用例にもある程度認められるが、次の二作品(説話)の場合などは、逆の意味にもなっているようである。

『宇治拾遺物語』の例

(1) この男女、たがひに七八十に成まで榮えて、男子、女子生みなどして、死の別れにぞ別れける。(「大系」二六九(六))

(2) (入々)「大宮大炊の御門辺に、大なる男三人、いくほどもへだてず、きりふせたる、あさましく使ひたる太刀かな。かたみにきり合て死たるかと思れば、おなじ太刀のつかひざま也。敵のしたりけるにや。(略)」(三三二(一(六)))

(1)が「かたみに」、(2)が「たがひに」とありたいところである。

但し、次のものは平安和文の用い方である。

(3) さて、商人ども、皆々とりとに妻にして住む。かたみに思ひあふこと、かぎりなし。片時もはなるべき心ちせずして住む間、

(二二(一(六)))

『十訓抄』の例

(1) 白壁皇子、(略)カスノ外ニテ位ニ付タモウヘクモナカリケルニ、百河ノ宰相タカヒ志深ク御座シケレハ、此事ヲ歎テ、

(「本文と索引」上二七〇(六))

(2) 鳥羽院御時、雨イトフリケル夜、若殿上人アマタ集テ、古キタメシノシナサタメモヤアリケン。「誰カユフニ文カク女シリタリ」

「おそる」と「おづ」、「たがひに」と「かたみに」の意味——中世王朝物語用語の用例から平安時代和文語の一面を見る——

ト云靜ヒ出テ、「今夜事キラム。文ヤリテ返事カタミニ見テ、ヲトリマサリ定メン」ナト云ホトニ、(下二五べ)

(1)が「かたみに」、(2)が「たがひに」とありたいところである。

「たがひに」「かたみに」は、平安時代において微妙な意味の相違を表し、特に物語用語としての和文語では、「かはる(り)」がはる(り)と「かたみに」が選ばれたが、やがて意味の違いが分からなくなり、「かたみに」は淘汰されていくのであるが、中世王朝物語の「たがひに」「かたみに」は、平安和文における相違を不完全ながら伝えていると見てよからう。

注

1 「平安時代和文語と中世王朝物語用語の一面面(一)」「(日本文学研究)第三四号(一九九九年)。本文中で前稿と呼ぶ。

2 山内洋一郎「山路の露の語彙——擬古文の語彙の特色を考える——」

(『山路の露 本文と総索引』所収)

3 この例については本文に異同があり、諸説のあるところ(萩谷朴『枕草子解環』第四卷四一四～四一五べに詳しい)だが、引用文のテキストに用いたものの頭注に従う。「恐る」の動作主体は「この国の帝」であることは、「唐土の帝」には尊敬語を付けないことから明らかである。

4 この例については、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』の八〇四べ(源氏物語と漢文訓読)に言及があり、「史記・前漢書・文選の「白虹貫日、太子畏之」に拠つたとされる。」と

あるが、「おづ」についてはコメントは無い。

5 田中牧郎「おそる」と「おづ」——平安・鎌倉時代を中心に——(『国語学研究』30(一九九〇年)は、この二語について副題に示された時代の資料の用例を精査された労作であるが、氏が「おそる」を「文章語」と認められたのには、稿者は従い難い。私見によれば、二語とも「日常的用語」であって、和文と訓点資料における出現数の相違は、専ら和文(物語)における意図的な用語選択のしからしめるところなのである。同論文の一節に、漢文訓読文では二語が共存していることを指摘した箇所で次のように述べられているのに、稿者は注目したい。

「おそる」を特に多用するのは、経義を解説した抽象的な叙述が多い賛・疏の類、「おづ」をも多用するのは、物語性が高く具体的な事件などの叙述も多い伝・紀・記の類、両者の中間に位置するのが、経義を解きながら物語性も帯びる経の類、という対応が見出せるのである。

6 宮垣明代「漢文訓読資料・和文資料における「情態副詞」についての一考察——「タガヒニ」「かたみに」を中心として——」(『山口国文』13(一九九〇年))